HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	命令文と話者の認識的立場 その2
Author(s)	高橋, 英光
Citation	北海道大學文學部紀要, 38(2), 109-118
Issue Date	1990-01-31
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/33551
Type	bulletin (article)
File Information	38(2)_PL109-118.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

命令文と話者の認識的立場　その2

高　橋　英　光

2.1　Jacobs (1981) は時制をもつ節を indicative mood, 無時制の，不定詞節を hypothetical mood であるとして，この indicative mood/hyopothetical mood と言う対比が英語の統語論の基本であるとしている。この区分の根拠は前者は様々な真理価値的主張を含む構文 ('a construction incorporating various truth value claims') であるのに対して，後者はある状況を概念化する構文 ('one conceptualizing a situation') であるとし，命令文は 'for... to' 補文の主節に当るものであると指摘する[1)]。

(1)　a.　She tried to kick the ball hard.
　　b.　Kick the ball hard!
　　c.　She ordered that the senator kick the ball hard.

つまり Jacobs によると命令文は hypothetical mood の一種であり命令文は 'a construction conceptualizing a situation' であることになる。Bolinger (1977 : 177) も裸の不定詞形は過去を表し難く，行為の未成就を示唆することから仮定性 (hypotheticalness) という共通の意味要素を持ち，これは命令文にも当てはまると主張している。Jacobs も Bolinger も命令文を含む英語の mood の意味の特質を適格にとらえていると思われるが，発話する過程に於ける話者の立場の動きについての考察がなされていない。構文の意味には言及しているが，hypothetical mood の一つとして命令文を発する際の話者自身の主体的状態についての視点が欠如している。話者自身の主体的状態とは話者が発話において常に知覚的に現実的な立場にとどまらず，様々な位置に移行すると言う現象である。この端的な例として直接話法がある。

(2)　a.　Fred said I had to believe her.
　　b.　Fred said, "You've got to believe her."

(2) a では話者が時間的にも空間的にも自己の現実的な立場に止まっている

が，bの 'Fred said' では現実的な立場にいる話者が 'You've got to believe her' ではまず Fred が語った過去へ知覚的に移動しているし，また自己を離れて Fred の立場と同化している。つまり話者は時間的にも空間的にも自己の現実的な立場から移行している。この様な話者の知覚的な立場の移行は(2)bのようなタイプに限らない。現実的世界と非現実的世界（仮定的世界）の間の移行も認められる。(3)aと(3)bはそれぞれ Factive complement と Non-factive complement であるが両者の違いは前者は話者が現実的立場で，後者は非現実的立場で発話する所にあると考えられる (cf. Takahashi (1985))。つまり(3)bでは主節から補文へと話者の立場の移行がある。

(3) a. I know/regret it is raining.
b. I think/believe it is raining.

この(3)bの non-factive complement は現実と離れた，一種の仮定の世界を扱っている点において，命令が扱う世界と共通するところがある事から，話者の主体的な条件も共通するものと予測する事ができる。(3)bの補文における話者の心的状態が命令文を発話する話者についても当てはまると仮定して，non-factive complement も命令文も話者は非現実の立場で発話するとしよう。この仮定に従うと命令文を含む hypothetical mood の構文とは話者が非現実の，仮定の世界へ知覚的に移行して発話する構文であるということになる。すなはち (1) のそれぞれの構文を発話する際の話者の立場を示すと次のようになる[2]。(下線部は非現実の，仮定的立場での発話を示す。)

(4) a. She tried to *kick the ball hard.*
b. *Kick the ball hard*!
c. She ordered that *the senator kick the ball hard.*

Jacobs の indicative 対 hypothetical という英語の mood の基本的区別と Bolinger の裸不定詞の意味解釈に従い本節の話者の立場の理論を命令文に導入すると，次に生じる問題は命令文の呼格と主語における話者の知覚的立場の問題である。理論上は次の4つの可能性がある。

(5) a. *VOC, SUJ VP.*

b．VOC, SUJ *VP*.
c．*VOC*, SUJ *VP*.
d．VOC, *SUJ VP*.

この四つの可能性のうち (a) と (c) は退けられる。呼格と VP は文法関係を持たないし，音調の切れ目が常に存在することから呼格と VP が同じ仮定的立場で発せられるとは考え難い。残る (b) と (d) では後者がより適当と思われる。主語と VP の間には音調の切れ目が必要ないし，照応に関する振舞いは (cf. 1.2) 主語が VP との文法関係がより強いことを示唆していることから，呼格は現実の世界にいる話者の立場で，主語は仮定の世界で発話すると想定するのが妥当であろう[3)]。

2.2　前節の提案で (6) のように NP＋VP (imperative) 構文では NP が主語であるならば話者はまず知覚的に仮定の世界に入ってから仮定の立場で構文全体を非現実の事柄として扱う一方で，NP が呼格の時は現実的立場で対象をとらえた後で音調の休止と共に仮定の立場へ移行して VP の部分を語ると仮定された[4)]。

(6)　a．*SUJ VP*
　　b．VOC *VP*

(6) に従い文 (7) の発話過程を例にとれば，次のようになる（下線部は話者の仮定的立場での発言を表す)。

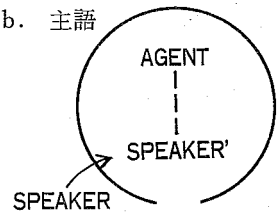
(7)　a．*The boy in the corner get back to your seat.*（主語）
　　b．The boy in the corner, *get back to your seat.*（呼格）

上の議論からの自然な帰結として同じ NP 'the boy in the corner' でも呼格なら現実世界の中で話者は行為者 (Agent) と向かい合っているが，主語では知覚上仮定の世界へ移行した話者が行為者と向かい合うことになる。(8) のように前者は話者と行為者が現実的な関係であるが後者では非現実的な関係である。

(8) a. 呼格

the real world

b. 主語



the unreal world

呼格と主語に話者の立場の観点からは現実対仮定の立場の対比があるとする提案は 1.3 で指摘された特定の文脈での三人称主語命令文の理解に役立つ可能性がある。二人称主語を伴う文脈ではその場にいない第三者でも命令文の主語に生じると言う呼格に許されないで主語にのみ可能な現象がある。これは一見命令文の基本原則に違反するが，少なくとも二種類が認められる。一つは you と三人称が並列して一つの名詞句を作る (9) の場合ともう一つは you を伴う命令文と並列する (10) の場合である。

(9) a. You and William do the cooking and I'll provide the wine.
b. You and your men keep watch on the left while I get into position on the right.
c. You and *William, do the cooking and I'll provide the wine.
d. You and *your men, keep watch on the left while I get into position on the right.

(10) a. You make the dinner and John do the washing up. No? All right then, John cook and you wash up.
b. You go for help and the children stay here with me.
c. You make the dinner and, *John, do the washing up.
d. You go for help and, *the children, stay here with me.

この場合，語用論的には you が命令文の対象の代表者で命令が聞き手の you を通して伝達されるものとして扱われ，話者と聞き手の二人称関係がその場にいない第三者にまで延長されていると解釈することはできるが (Davies (1986: 140-1)), (6) のような発話過程に於ける話者の知覚的立場についての仮定は上のような現象の説明を容易にする。つまり現実世界にいるかぎり (9), (10) の文脈で話者は現実に目の前にいない第三者に呼格で語り掛けることはできない。しかし仮定の世界の中では話者と行為者が非現実的な二人称関係

であるから，目前にいない対象と二人称の関係であるかのごとく扱う事が可能になってくる。この為，呼格ではその場にいない William や John や the children を呼ぶことはできないが，主語では可能になってくる。1.3 で示したように (9) a, (9) b, (10) a, (10) b の you 以外の主語を三人称代名詞に代えると命令文としての容認性が著しく下がる。

(11) You and *he go the cooking and I'll provide the wine.
You and *they keep watch on the left while I get into position on the right.
You make the dinner and *he do the washing up.
You go for help and *they stay with me.

これは統語的には三人称でも実質的に二人称的に，或いは二人称の延長として対象をとらえていることを示唆している。非現実的世界の中で話者と命令文の対象との間に二人称的関係が存在すると想定するならば，命令文は実質的に二人称と言う原則に低触することなく合理的な説明が与えられる事になる。呼格と主語の間の聞き手の指示についての制限の強さの違い (cf. 1.3) もこのそれぞれにおける話者の知覚的立場の違いから説明することが可能になってくる。

2.3　この節では呼格と主語の現実世界対仮定世界という提案が一節で挙げた DEICTIC 対 SYNTACTIC, EMOTIONALITY 対 REFERENTIALITY という呼格と主語の間に認められる統語・意味的対比に対してどの様な理論的意義を持つのかを検討する。

呼格と主語の間の DEICTIC/SYNTACTIC の対比を示唆する証拠は以下のものである (cf. 1.1)。

A）you there は呼格にのみ適する。

B）no one, nobodyは主語のみ適している。

C）呼格の you は意味的に非常に無礼で攻撃的な響きがある。

D）主語では二人称代名詞照応と三人称代名詞照応の両方が可能だが，呼格では二人称照応のみ可能。

話者が現実的立場にいることが聞き手を you there と直示的に表現するのを容易にする一方で no one, nobody と表現するのを困難にすることは明白である。反対に仮定的立場は聞き手を no one, nobody と表現するのを容易にするものと同じく理解し易い。

C) については呼格の you の統語的単独性と直示性にもその原因が求められるが，この直示性と話者の現実的立場は明らかに表裏一体の関係にあると考えることができる。

(12) a. You, *leave your bag here.*
b. *You leave your bag here.*

D) についても直接には呼格の直示性と NP+VP 構文の NP と VP の統語関係の有無が大きな要因となっていると思われる。

(13) a. *The boy in the corner get back to your/his seat.*
b. The boy in the corner, *get back to your/*his seat.*

例えば (13) b では NP は現実的立場で，VP は仮定の立場でという風に呼格と動詞句の間で話者の知覚的立場の隔たりが根底に存在していることが果して "the boy in the corner" を媒介に聞き手を認識するのを妨げているかどうか定かではないが，少くとも (13) a において話者の立場の一定性が命令文の主語と後続部との統語的結び付きを背後で補う要素であると考えることは理に適っている。

呼格と主語の間の EMOTIONALITY 対 REFERENTIALITY の対比を示唆する証拠は次のものである (cf. 1.2)。

A) 感情的，話者指向的語句が呼格では好まれるが主語には適さない。

B) 聞き手が誰であるか明白な場面では固有名詞主語を明示することは適さないが呼格には適する。
(聞き手が複数いて誰を指すのか不明な場面では主語か呼格で固有名詞を明示することが必要である。)

呼格は対象指示性と同様主観性を持ち，主語は対象指示性が強いという事実と，呼格は現実的立場，主語は仮定的立場で語られるという提案との関係を

考えよう。両者の関係は直観的に明白ではないが，この問題に関わるのは一般に話者指向的語句には常に統語的に任意の要素であり，意味的に命題の一部とならないという性質を持つ事実である。英語の話者指向性の語句としては間投詞，一部の副詞 (please, probably, maybe...)，「強意」の do 等がある[5]。これらの語句が命令文と共に生じる場合の発話過程を検討してみよう。

(14) a. Rob, *please* go to the kitchen,
　　 b. *Do* come back and help your father.

上の please も do も意味的に命令文の命題の一部を構成せず，命令文の命題内容に対する話者自身の態度を表している点で現実的立場での発言と考えるのが妥当と思われる。これらは話者にもっとも近い位置で発せられるが故に現実的立場で語られる傾向が強く，下位の節に埋め込まれ難い。例え希に下位の節に埋めこまれても意味的には (15) のように話者自身の立場の痕跡を残している。

(15) a. *Please* spend the weekend with your children.
　　 b. Mom has asked Dad to *please* spend the weekend with his children.
　　 c. If you *please* understand how I felt, you can forgive me.
　　 d. Mom has asked Dad to (**do*) spend the weekend with his children.

これは程度に違いがあっても多かれ少なかれ話者指向的語句を発言する時，話者が現実的立場にいることからの自然な結果であって，話者指向性と話者の現実的立場と深い繋がりをここに見出だすことができる。つまり話者指向的性質を持つ呼格が現実的立場で発話されることは必然的なのであり，名詞句の話者指向性の度合いが高いほど呼格になり易いし，逆にこの度合いが少なくなるにつれて仮定的立場で発言される為の条件が整うことになる。つまり命令文主語となり易くなる。

3. 本稿では命令文に名詞句が先行して NP＋VP (imperative) の形式を取るとき統語的には任意であるこの NP が呼格であったり主語であったりするこ

とを決定する原理が何であるかを検討してきた。その結果，単に話されるスピードや音調の切れ目と言う形式的な違いで決定されるものではないことが明らかになった。また従来から指摘されている文法関係の有無と別に，命令文の呼格と主語にはDEIXIC対SYNTACTC, EMOTIONALITY対REFERENTIALITYという相対的な意味の対比が認められることが指摘された。次にこれらの対比で十分な説明ができない現象があることを示し，この問題の総合的な理解のためにmood一般の考察を行い話者の知覚的立場の理論を導入することで未決の問題の解決を試みた。結論として命令文は知覚的に仮定の立場で発話される構文であるが，呼格は現実の立場で，主語は仮定的立場で話されるため，NP (呼格)+VPでは話者の立場に移行があるが，NP (主語)+VPでは一定していることになり，この発話過程の違いから必然的に生じて来る話者と聞き手が二人称関係を結ぶ世界の種類の違いが命令文の呼格と主語の間の微妙な振舞いの差異の背後に存在することが提案された。ただし本稿では英語の命令文の一部のみを扱い他の構文，例えば並列構文や否定命令文は扱っていない。本稿で提案された発話過程における話者の立場の理論の信憑性と有効性を検証するにはこれら様々な命令文構文に分析を適用してみる必要がある。

NOTES

1 Huddleston (1984: 359, 1988: 133) では，命令文は 'a subclass of a somewhat larger class of jussive clauses' とされている。命令文以外の Jussive には主節タイプ (i) と従節タイプ (ii) がある。

(i) The devil take the hindmost.
God save the Queen!
So be it!

(ii) [It is essential] that he accompany her.
[I insist] that they not be told.

Huddleston の Jussive には不定詞が含まれていなく，Jacobs の hypothetical mood には (i) の構文が含まれるかどうか不明であるが，明瞭さと mood を理

解する上での射程の広さから，本稿では hypothetical という言葉を (i) も含めて採用する。

2　Dixon (1984 : 592) は不定詞の to の意味を "... *to* involves an agent moving toward some unrealised activity." と説明している。

3　indicative mood においても話者は非現実的立場をとることができる 3) b の従節とは別に次のような主節の例もある。

(i)　*A girl leaves her parents at 14, and trys to work.* What do you think she will get?

(i) では「文脈的」に非現実的立場を取るのに対して hypothetical mood では非現実的立場が「文法的」に取られる違いがある。

4　Huddleston (1984 : 361) は (i) (ii) の文末の名詞句が 'a simple contour' で話されるか，コンマなしで書かれる場合 "thematically postponed subjects" となり得る可能性を示唆している。

(i)　Put your hands up *all those who got it irght.*
(ii)　Stand up *the boy who said that.*
(iii)　Put your/*their hands up *all those who got it right.*

この提案について多くの学者は否定的だが，もし非現実的立場で発話されると言うことが上の文の下線の NP が主語か否かを決める基準とすれば，これらの NP が主語である可能性は完全に否定できないと思われる。

5　付加疑問文は意味的には明らかに speaker-oriented 的要素をもつが，三人称命令文に対して二人称照応と三人称照応の両方が可能である。

(i)　Somebody open this door, will you?/will they?
(Quirk et al. (1985 : 829))

つまり付加疑問文は命題の一部を構成しない点において呼格と同じく現実的立場で発話されると思われるが，統語的には先行する命令部との連続性をもっている所が呼格と性格を異にする。

References

Bolinger, A. 1977. *Meaning and Form.* London : Longman.

Culicover, P. W. 1976. *Syntax.* New York: Academic Press.

Davies, E. 1986. *The English Imperative.* London: Croom Helm.

Dixon, R. M. W. 1984. "The Semantic basis of Syntactic Properties, "BLS 10, 583–95.

Downes, W. 1977. "The Imperative and Pragmatics," *Journal of Linguistics* 13, 77–97.

Downing, B. T. 1969. "Vocatives and Third-person Imperatives in English," *Papers in Linguistics* 1, 570–591.

Hamblin, C. L. 1987. *Imperatives.* Oxford: Basil Blackwell.

Harada, S. I. 1971. "Where do vocatives come from?" in *English Linguistics* 5. Kaitakusha., 2–43.

Huddleston, R. D. 1984. *Introduction to the Grammar of English.* Cambridge: Cambridge University Press.

———. 1988. *English Grammar: an outline.* Cambridge: Cambridge University Press.

Jacobs, R. A. 1981. "On being hypothetical," *Chicago Linguistic Society* 17, 99–107.

James, F. 1986. *Semantics of the English Subjunctive.* UBC Press.

Langacker, R. W. 1987. *Foundations of Cognitive Grammar. volume 1 Theoretical Prerequisites.* Stanford: Stanford University Press.

Lawler, J. M. 1975. "Elliptical Conditionals and/or Hyperbolic Imperatives: Some Remarks on the Inherent Inadequacy of Derivations," Chicago Linguistic Society 11, 371–81.

Lyons, J. 1977. *Semantics, Volume* 2. London: Cambridge University Press.

三浦つとむ。1967.『認識と言語の理論』勁草書房。

Palmer, F. R. 1986. *Mood and Modality.* Cambridge: Cambridge University Press.

Quirk, R., Greenbaum, S., Leech, G. N. and Svartvik, J. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language.* London: Longman.

Schreiber, P. A. 1972. "Style Disjuncts and the Performative Analysis," *Linguistic Inquiry* 3, 321–347.

Takahashi, H. 1981. "On So-Called Speaker-Oriented Adverbs" *The Annual Report of Cultural Science* 30–1. The Faculty of letters Hokkaido University., 105–22.

———. 1985。「複文の認識構造について　その 2」 小樽商科大学人文研究，第 69 号。57–76.

———. 1989。「命令文と話者の認識的立場」 北海道大学文学部紀要，38–1, 47–61.

Thorne, J. P. 1966. "English Imperative Sentences," *Journal of Linguistics* 2, 69–78.

時枝誠記。1941。『国語学原論』岩波書店.